

水仙月の四日

宮沢賢治

雪婆んごは、遠くへ出かけておりました。猫のような耳をもち、ぼやぼやした灰色の髪をした雪婆んごは、西の山脈の、縮れたぎらぎらの雲を越えて、遠くへ出かけていたのです。

一人の子供が、赤い毛布にくるまって、しきりにカリメラのことを考えながら、大きな象の頭の形をした、雪丘の裾を、せかせかうちの方へ急いでおりました。

(そら、新聞紙をとがった形に巻いて、ふうふうと吹くと、炭からまるで青火が燃える。僕はカリメラ鍋に赤砂糖をひとつまみ入れて、それからザラメをひとつまみ入れる。水を足して、あとはくつくつくと煮るんだ。) 本当にもう一生懸命、子供はカリメラのことを考えながらうちの方へ急いでいました。

お日様は、空のずうっと遠くの透きとおった冷たいところで、まばゆい白い火を、どしどしお焚きなさいます。

その光はまっすぐに四方に発射し、下の方に落ちてきては、ひっそりした台地の雪を、一面まばゆい雪花石膏の板にしました。

二匹の雪狼が、べろべろ真っ赤な舌を吐きながら、象の頭の形をした、雪丘の上の方を歩いていました。こいつらは人の目には見えないのですが、いっぺん風にあおられると、台地の外れの雪の上から、すぐぼやぼやの雪雲を踏んで、空を駆け回りもするのです。

「しゅ、あんまり行っていけないいたら。」雪狼の後ろから白熊の毛皮の三角帽子をあみだにかぶり、顔をりんごのように輝かしながら、雪童子がゆっくり歩いてきました。雪狼どもは頭を振ってくるりと回り、また真っ赤な舌を吐いて走りまわりました。

「カシオピア、もう水仙が咲きだすぞ
おまえのガラスの水車
きつきと回せ。」

雪童子は真っ青な空を見上げて見えない星に叫びました。その空からは青光が波になってわくわくと降り、雪狼どもは、ずうっと遠くて炎のように赤い舌をべろべろ吐いています。

「しゅ、戻れたら、しゅ。」雪童子が跳ね上がるようにして叱りましたら、今まで雪にくっつきり落ちていた雪童子の影法師は、ぎらっと白い光に変わり、狼どもは耳を立てて一散に戻ってきました。

「アンドロメダ、あぜみの花がもう咲くぞ、
おまえのランプのアルコール、
しゅうしゅと噴かせ。」

雪童子は、風のように象の形の丘に登りました。雪には風で貝殻のような型がつき、その頂は、一本の大きな栗の木が、美しい黄金色の宿り木のまりをつけて立っていました。

4 【カリメラ】砂糖菓子の一つ。カルメラ。
7 【ザラメ】砂糖の一種。結晶が粗く、やや赤みがある。
13 【雪花石膏】「石膏」は、白または無色の軟らかい鉱物。「雪花石膏」は、白色で結晶が密になったもの。

3 【あみだ】前の部分を上げて額が見える帽子のかぶり方。
6 【カシオピア】カシオペヤ座。
15 【アンドロメダ】アンドロメダ座。
16 【あぜみ】アセビ。ツツジ科の常緑低木。早春につぼのような形の白い花が多数咲く。
20 【宿り木】ビャクダン科の常緑低木。一部の栄養を他から吸収する半寄生植物。

「取っといで。」雪童子が丘を上りながら言いますと、一匹の雪狼は、主人の小さな歯のちらつと光るのを見るや、ゴムまりのようにいきなり木に跳ね上がって、その赤い実のついた小さな枝を、がちがちかじりました。木の上でしきりに首を曲げている雪狼の影法師は、大きく長く丘の雪に落ち、枝はどうとう青い皮と、黄色の心とをちぎられて、今上ってきたばかりの雪童子の足もとに落ちました。

「ありがとうございます。」雪童子はそれを拾いながら、白と藍色の野原に立っている、美しい町をはるかに眺めました。川がきらきら光って、停車場からは白い煙も上がっていました。雪童子は目を丘の麓に落としました。その山裾の細い雪道を、さっきの赤毛布を着た子供が、一心に山のうちの方へ急いでいるのでした。

「あいつは昨日、木炭のそりを押していた。砂糖を買って、自分だけ帰ってきたな。」雪童子は笑いながら、手に持っていた宿り木の枝を、ぷいっと子供に投げつけました。枝はまるで弾のようにまっすぐに飛んでいって、確かに子供の目の前に落ちました。

子供はびっくりして枝を拾って、きよろきよろあちこちを見回しています。雪童子は笑って革むちを一つひゅうと鳴らしました。

すると、雲もなく磨き上げられたような群青の空から、真っ白な雪が、さぎの毛のように、一面に落ちてきました。それは下の平原の雪や、ビール色の日光、茶色のひのきでできあがった、静かなきれいな日曜日を、いっそう美しくしたのです。

子供は、宿り木の枝を持って、一生懸命に歩きだしました。

けれども、その立派な雪が落ちきってしまった頃から、お日様はなんだか空の遠くの方へお移りになって、そこのお旅屋で、あのまばゆい白い火を、新しくお焚きなされているようでした。

そして西北の方からは、少し風が吹いてきました。

もうよほど、空も冷たくなってきたのです。東の遠くの海の方では、空の仕掛けを外したような、小さなカタツという音が聞こえ、いつか真っ白な鏡に変わってしまったお日様の面を、何か小さなものがどンドン横切っていくようです。

雪童子は革むちを脇の下に挟み、固く腕を組み、唇を結んで、その風の吹いてくる方をじっと見ていました。狼どもも、まっすぐに首を伸ばして、しきりにそっちを望みました。

風はだんだん強くなり、足もとの雪は、さらさらさらさら後ろへ流れ、まもなく向こうの山脈の頂に、ぱっと白い煙のようなものが立ったと思うと、もう西の方は、すっかり灰色に暗くなりました。

雪童子の目は、鋭く燃えるように光りました。空はすっかり白くなり、風はまるで引き裂くよう、早くも乾いた細かな雪がやってきました。そこらはまるで灰色の雪でいっぱいです。雪だか雲だかわからないのです。

丘の稜は、もうあっちもこっちも、みんな一度に、きしるように切るように鳴りだしました。地平線も町も、みんな暗い煙の向こうになってしまい、雪童子の白い影ばかり、ぼんやりまっすぐに立っています。

その裂くようなほえるような風の音の中から、

「ひゅう、何をぐずぐずしているの。さあ降らすんだよ。降らすんだよ。ひゅうひゅうひゅう、ひゅうひゅう、降らすんだよ、飛ばすんだよ、何をぐずぐずしているの。こんなに忙しいのにさ。ひゅう、ひゅう、向こうからさえわざと三人連れてきたじゃないか。さあ、降らすんだよ。ひゅう。」怪しい声が聞こえてきました。

7 【停車場】列車が発着する場所。駅。

15 【さぎ】水鳥の一種。くちばしや首、足が長い。

16 【ひのき】ヒノキ科の常緑高木。

20 【お旅屋】旅人の宿泊所。

13 【稜】とがって突き出た部分。

19 【わざと】わざわざ。

雪童子はまるで電氣にかかったように飛びたちました。雪婆んごがやってきたのです。ぱちっ、雪童子の革むちが鳴りました。狼どもはいっぺんに跳ね上がりました。雪童子は顔色も青ざめ、唇も結ばれ、帽子も飛んでしまいました。

「ひゅう、ひゅう、さあしっかりやるんだよ。怠けちゃいけないよ。ひゅう、ひゅう。さあしっかりやっておくれ。今日はこころは水仙月の四日だよ。さあしっかりさ。ひゅう。」

雪婆んごの、ぼやぼや冷たい白髪は、雪と風の中で渦になりました。どんだん駆ける黒雲の間から、そのとがった耳と、ぎらぎら光る黄金の目も見えます。

西の方の野原から連れてこられた三人の雪童子も、みんな顔色に血の気もなく、きちっと唇をかんで、お互い挨拶さえも交わさずに、もう続けざませわしく革むちを鳴らし行ったり来たりしました。もうどこが丘だか雪煙だか空だかさえもわからなかったのです。聞こえるものは雪婆んごのあちこち行ったり来たりして叫ぶ声、お互いの革むちの音、それから今は雪の中を駆け歩く九匹の雪狼どもの息の音ばかり、その中から雪童子はふと、風に消されて泣いているさっきの子供の声を聞きました。

雪童子の瞳はちょっとおかしく燃えました。しばらく立ち止まって考えていましたがいきなり激しくむちを振ってそっちへ走ったのです。

けれどもそれは方角が違っていたらしく雪童子はずうっと南の方の黒い松山にぶっかかりました。雪童子は革むちを脇に挟んで耳をすましました。

「ひゅう、ひゅう、怠けちゃ承知しないよ。降らすんだよ、降らすんだよ。さあ、ひゅう。今日は水仙月の四日だよ。ひゅう、ひゅう、ひゅう、ひゅうひゅう。」

そんな激しい風や雪の声の間から透きとおるような泣き声がちらっとまた聞こえてきました。

雪童子はまっすぐにそっちへ駆けていきました。雪婆んごの振り乱した髪が、その顔に気味悪く触りました。峠の雪の中に、赤い毛布をかぶったさっきの子が、風に囲まれて、もう足を雪から抜けなくなっってよろよろ倒れ、雪に手をついて、起き上がろうとして泣いていたのです。

「毛布をかぶって、うつむけになっておいで。毛布をかぶって、うつむけになっておいで。ひゅう。」雪童子は走りながら叫びました。けれどもそれは子供にはただ風の声と聞こえ、その形は目に見えなかったのです。

「うつむけに倒れておいで。ひゅう。動いちゃいけない。じきやむから毛布をかぶって倒れておいで。」雪童子は駆け戻りながらまた叫びました。子供はやっぱり起き上がろうとしてもがいていました。

「倒れておいで、ひゅう、黙ってうつむけに倒れておいで、今日はそんなに寒くないんだから凍えやしない。」

雪童子は、も一度走り抜けながら叫びました。子供は口をびくびく曲げて泣きながらまた起き上がろうとしました。

「ひゅう、もっとしっかりやっておくれ、怠けちゃいけない。さあ、ひゅう。」

雪婆んごがやってきました。その裂けたように紫な口もがった歯もぼんやり見えました。

「おや、おかしな子がいるね、そうそう、こっちへとおしまい。水仙月の四日だもの、一人や二人とったっていいんだよ。」

「ええ、そうです。さあ、死んでしまえ。」雪童子はわざとひどくぶっつきながらまたそっと

言いました。

「倒れているんだよ。動いちゃいけない。動いちゃいけないってら。」

狼どもが気違いのように駆け巡り、黒い足は雪雲の間からちらちらしました。

「そうそう、それでいいよ。さあ、降らしておくれ。急げちゃ承知しないよ。ひゅうひゅうひゅう、ひゅひゅ。」雪婆んごは、また向こうへ飛んでいきました。

子供はまた起き上がろうとしました。雪童子は笑いながら、も一度ひどく突き当たりました。もうその頃は、ぼんやり暗くなって、まだ三時にもならないに、日が暮れるように思われたので、子供は力も尽きて、もう起き上がろうともしませんでした。雪童子は笑いながら、手を伸ばして、その赤い毛布を上からすっかり掛けてやりました。

「そうして眠っておいで。布団をたくさん掛けてあげるから。そうすれば凍えないんだよ。明日の朝までカリメラの夢を見ておいで。」

雪童子は同じところを何遍も駆けて、雪をたくさん子供の上にかぶせました。まもなく赤い毛布も見えなくなり、辺りとの高さも同じになってしまいました。

「あの子供は、僕のやった宿り木を持っていた。」雪童子はつぶやいて、ちょっと泣くようにしました。

「さあ、しっかり、今日は夜の二時まで休みなしだよ。ここらは水仙月の四日なんだから、休んじやいけない。さあ、降らしておくれ。ひゅう、ひゅうひゅう、ひゅひゅ。」

雪婆んごはまた遠くの風の中で叫びました。

そして、風と雪と、ぼさぼさの灰のような雲の中で、本当に日は暮れ雪は夜中降って降って降ったのです。やっと夜明けに近い頃、雪婆んごはも一度、南から北へまっすぐにはせながら言

いました。

「さあ、もうそろそろ休んでいいよ。あたしはこれからまた海の方へ行くからね、誰もついてこないでいいよ。ゆっくり休んでこの次の支度をしておいでしてくれ。ああまあいいあんばいだった。水仙月の四日がうまくすんで。」

その目は闇の中でおかしく青く光り、ぼさぼさの髪を渦巻かせ口をびくびくしながら、東の方へ駆けていきました。

野原も丘もほっとしたようになって、雪は青白く光りました。空もいつかすっかり晴れて、桔梗色の天球には、一面の星座が瞬きました。

雪童子らは、めいめい自分の狼を連れて、初めてお互い挨拶しました。

「ずいぶんひどかったね。」

「ああ。」

「今度はいつ会うだろう。」

「いつだろうねえ、しかし今年中に、もう二遍ぐらいのもんだろう。」

「早く一緒に北へ帰りたいね。」

「ああ。」

「さっき子供が一人死んだな。」

「大丈夫だよ。眠ってるんだ。明日あそこへ僕印を付けておくから。」

「ああ、もう帰ろう。夜明けまでに向こうへ行かなくちゃ。」

「まあいいだろう。僕ね、どうしてもわからない。あいつはカシオペアの三つ星だろう。みんな青い火なんだろう。それなのに、どうして火がよく燃えれば、雪をよこすんだろう。」

3 【気違い】考えや行動が正常でない人。現在では差別語として使用が避けられる。

20 【はせながら】走りながら。

3 【いいあんばい】物事がうまいぐあいにいくこと。

8 【桔梗色】青みがかった紫色。

「それはね、電気菓子と同じだよ。そら、ぐるぐるぐる回っているだろう。ザラメがみんな、ふわふわのお菓子になるねえ、だから火がよく燃えればいいんだよ。」

「ああ。」

「じゃ、さよなら。」

「さよなら。」

三人の雪童子は、九匹の雪狼を連れて、西の方へ帰っていききました。まもなく東の空が黄ばらのように光り、琥珀色に輝き、黄金に燃えだしました。丘も野原も新しい雪でいっぱいです。

雪狼どもは疲れてぐったり座っています。雪童子も雪に座って笑いました。その頬はりんごのよう、その息は百合のように香りました。

ぎらぎらのお日様がお昇りになりました。今朝は青みがかっていっそう立派です。日光は桃色にいっぱい流れました。雪狼は起き上がって大きく口を開き、その口からは青い炎がゆらゆらと燃えました。

「さあ、おまえたちは僕についておいで。夜が明けたから、あの子供を起こさなきゃあいけない。」

雪童子は走って、あの昨日の子供の埋まっているところへ行きました。

「さあ、ここらの雪を散らしておくれ。」

雪狼どもは、たちまち後足で、そこらの雪を蹴立てました。風がそれを煙のように飛ばしました。

かんじきを履き毛皮を着た人が、村の方から急いでやってきました。

「もういいよ。」雪童子は子供の赤い毛布の端が、ちらっと雪から出たのを見て叫びました。

「お父さんが来たよ。もう目をお覚まし。」雪童子は後ろの丘に駆け上がって一本の雪煙を立てながら叫びました。子供はちらっと動いたようでした。そして毛皮の人は一生懸命走ってきました。

〈出典 『宮沢賢治全集』(筑摩書房)、一九八六年〉

【著者】宮沢賢治(みやざわ けんじ)

一八九六(明治二九)年—一九三三(昭和八)年

詩人。童話作家。岩手県の生まれ。

【著書】『銀河鉄道の夜』『春と修羅』『風の又三郎』など

7 【琥珀】大昔の木のやに

が、地中で石のようになつたもの。赤茶色や黄色で、つやがある。

20

【かんじき】雪道で、深い雪の中に踏み込まないよう履き物の下につける、輪の形をした用具。